Ⅰ　事業の背景・目的等

1　背　景

※　予防を重視した制度への改正

(1)　デイサービスセンターの現状

①　集団的処遇、画一的なサービス

デイサービスセンターで行われるレクリエーションは、利用者全員に対して集団的に体操や合唱、ミニゲーム等が行われているものが多い。

→　個人の好みやニーズが反映されにくい画一的なサービス。

②　一方的なサービス提供

利用者が自らの意思で活動するプログラムは多くはなく、利用者にとって受け身的なサービス。

→・デイサービスセンターに楽しみを見いだせず義務的に通所している利用者
　・レクリエーションに参加することを嫌がる利用者
　もいるとの指摘。

③　楽しみが一時的

その場で楽しいと感じたとしても、その場限りの一時的な楽しみで終わることが多い。

→　利用者が自宅に帰ってからや通所を終了したときにデイサービスセンターで行ってきた活動が継続できるようにする。

④　介護予防の視点が重要

これまでのデイサービスは生活支援が中心。

→　今後は、介護予防の視点が求められる。

(2)　団塊世代の高齢化

○　いわゆる団塊世代は、間もなく60歳の定年を迎え、退職者が増加。

→　人材が豊富であり、退職しても気力と体力が充実した団塊世代を元気高齢者として人材活用する必要。

2　事業の目的

(1)　高齢者が楽しみ・やりがいを感じられるデイサービスの提供

◇　介護予防の事業における最大の懸案

・参　加　高齢者に事業への参加を促すこと。

・継　続　一定期間のサービス提供終了後に、事業参加時と同様に自ら取組を継続することができるかどうか。

⇓

○　従来の一時的で受動的な楽しみを自ら追求していく楽しみに変えること。

○　意欲を持って自主的・継続的に取り組んでもらい、生活機能を向上させること。

⇑

やりがい・個別ケアの観点

(2)　元気高齢者の生きがいづくり・介護予防

①　生きがいづくりの受け皿

元気高齢者をボランティアとして活用することによって、今後増加していく高齢者、団塊の世代が高齢者となる際の生きがいづくりの受け皿を準備。

②　元気高齢者の介護予防

高齢者が要支援・要介護状態になる前の元気な段階から、介護予防に関する基本的な認識を持ちつつ、ボランティアという社会活動を実践することにより、元気高齢者自身に介護予防の効果をもたらす。

※　マンパワーの確保

小グループ活動を行う場合、従来型のデイサービス以上に人的労力が必要となることにも対応。

3　事業の位置付け

①　新たなデイサービスのあり方

集団的処遇・画一的なサービス提供が行われてきた従来のデイサービスのあり方を変革。

②　介護予防を目指した「アクティビティ」のあり方

介護予防通所介護事業所や市町村における地域支援事業の通所型介護予防事業で一般的に行われる「アクティビティ等」について、全国に先駆けて、介護予防のためにより効果的で、自宅等においても継続的な活動が可能なサービス提供の一つのあり方を提案、実証。